村上忠順翁顕彰会報

村上忠順翁像

村上忠明像

堤町　杉浦正明氏　寄贈

村上忠順翁顕彰会報　第30号

編集　村上忠順翁顕彰会事務局

発行　　平成31年3月31日

★　目　次　★

・会長の言葉　P. 2
・歴史探訪に参加して　P. 3
・女性部研修会　P. 4
・忠順翁の明治十年の東京行　p. 5-7
・平成三十年度活動報告　P. 7
・第13回「忠順大賞」入賞作品　P. 7-8

新たな一歩に向けて

村上忠順翁顕彰会
会長　近藤　光良

村上忠順翁顕彰会が平成元年に設立されてから三十年が経過しました。奇しくも、今年は平成の元号が終わる年になりました。この三十年間いろんなことがありましたが、最近世界的に大きな変化の時となってきたように思います。トランプ政権をはじめとする自国さえ良ければ、といった風潮があちこちで浮上してきました。その大きな要因は、内戦による移民や難民による各国民の不満が原因のように感じます。何となくギスギスした社会になってきた、と感じるのは私だけでしょうか。

一方、科学技術は驚くほど進歩し続けています。電気自動車や空飛ぶ車の開発が進み、また情報技術の発達によりロボットや人工知能がすごい勢いで進歩しています。車の自動運転も目前に迫っています。これまで人間が苦労して解決した難題も、人工知能があっという間に結論を出してくれる時代が来ています。この先我々人間は一体何をすればいいのか、肉体労働や事務作業が自動化され、ただ機械がする作業を監視するだけ、そんな時代が来るのでしょうか、少々不安で、味気なく感じます。

こんな時代だからこそ、私は人と人とのコミュニケーションを通じて喜怒哀楽を味わい、たわいのないことに喜びを感じる、そんな人間らしい社会でありたいと願うものです。

私たち村上忠順翁顕彰会は江戸時代末期の地域や人々がどのようなことを考え、楽しみとしていたか、当時前林の郷土で活躍した村上忠順翁が残した文章を通じて知ろうとしています。それはあたかもワンダーランドに迷い込んだような気分を味わえます。江戸時代末期は現在以上に社会も知識も変化の激しい社会でした。だからこそ、忠順翁が残した文章を通して今一度じっくりと人としての在り方を学ぶことが重要であろうと感じます。

また、村上忠順翁顕彰会では、文字にして後世に残すことの大切さを考え、今年度も設立三十年を記念し、これまでの叢書に加え、小冊子を発刊することにしました。

一つは、過去十二年間にわたり多くの皆様から忠順大賞に応募いただいた短歌の中から優れた作品と「忠順さん物語」をまとめました。もう一冊は、この十年間の活動をまとめた冊子です。こうして忠順翁が残した偉業を文字にして分かりやすく解説し、後世に伝えていくことの大切さを感じています。このことは毎年開催している四方樹（よもぎ）大学講師の塩村先生も常々おっしゃられていることです。

当顕彰会がこれまで継続できていることは、会員の皆様の温かいご支援のおかげと感謝申し上げております。設立以来三十年経過した当顕彰会としては、このような激動の社会だからこそ、かつて幕末という激動社会で活動した村上忠順翁の生き方を、新たな時代に向けて学びつつ次世代に継承できるよう努力を続けてまいりたいと思います。

そして、もう一つ、今年設立三十年にあたり新たな出来事がありました。当会の会員である堤町の杉浦正明さんから顕彰会に、日本画家石川美峰（一八九二～一九六九）作の村上忠順翁と息子の村上忠明の肖像画を寄贈していただきました。作品は保存の関係で豊田市の文化財課に寄託してありますが、関連行事の際に展示したいと考えております。

（表紙参照）。

歴史探訪に参加して

高岡町　前田秀己

平成三十年十月二日に行われた歴史探訪に三十七名の会員の皆様と参加させていただきました。今回は「村上文庫の恩人を訪ねて」をテーマに刈谷市郷土資料館、丈山苑、トヨタ会館の三ヵ所を訪問、見学いたしました。

初めに訪れた刈谷市郷土資料館では、館内見学の後、今回のテーマである「村上文庫の恩人」について学芸員の方からお話を伺いました。

刈谷市郷土資料館玄関前にて

宍戸俊治（医師・当時町議会議員・後に愛知県医師会副会長）と藤井清七（当時町議会議員・後に刈谷町長）の両氏は大正三年九月、私財を投じ村上忠順の蔵書約二万五千冊購入し、新たに建設した図書閲覧室と書庫を合わせて当時の刈谷町へ寄贈。森銑三氏（後に著名な書誌学者）は二万五千冊の膨大な古書を整理分類し「村上文庫目録」としてまとめた。それら村上文庫の資料は昭和三十三年に刈谷市指定有形文化財に指定されたとのことです。

私は今回の紀行文を書くに当たって、村上文庫についてもう少し知っておきたい、できれば実際に目にしてみたいと思い、後日刈谷市中央図書館を訪ねてみました。しかし、残念。実物は重い扉で厳重に管理されており一般人では入ることはできないとのこと。所員に申し出たところ資料室のパソコンでデジタル画像でならば閲覧できるとのこと。折角足を運んだのだからとデジタル画像で蔵書の目録やその一部を閲覧しました。目録一覧を画面で見るだけでもその数は膨大であり、それを一冊一冊手に取って整理分類したという森銑三氏の偉業にはあらためて驚かされました。

刈谷市郷土資料館ではさらに「森銑三と森三郎兄弟」「幕末をかけた仮谷の志士たち・維新の魁天誅組」「甦る刈谷城・復元ＣＧ・刈谷城と城下町」の三本のＤＶＤを視聴しました。

次に訪れたのは丈山苑。江戸時代初期の漢詩人であり書家として知られ作庭家でもある石川丈山。忠順翁も大いに影響を受けた人物とのことです。その丈山生誕の地、安城市和泉に彼が終の栖とした京都の詩仙堂をイメージして再現し造られたのが丈山苑とのことです。庭を眺めながら落ち着いた気分でお茶をいただき、景色を楽しみながら苑内を散策し、しばし風雅な世界に浸ることができました。

石川丈山

最後に訪れたのはトヨタ会館。究極のエコカー「ミライ」やレクサスの最上級車、モータースポーツ車などの展示。安全、環境、技術、未来等、トヨタの車への思いが様々な角度から紹介されており、興味深く見学することができました。

今回の訪問先はいずれも私にとっては初めての場所であり、大変勉強になると同時に楽しく参加させていただきました。

企画運営に当たり様々な点にご配慮いただきました事務局の皆様に深く感謝申し上げます。

女性部会研修会

猛暑の八月二十九日、三十五名の皆様と共に水の都大垣に出かけました。七月四日を予定しておりましたが、天候不良の為延期となり、当初の参加者と多少入れ替わったメンバーでの研修会となりました。熱中症などを心配しながらの散策となりましたが、参加者から、ご意見、ご感想をたくさんいただきました。その一部を紹介します。　（事務局　酒井）

一、奥の細道むすびの地記念館

・ＡＶシアター、初めて見ました。とてもきれいで、自分がそこに居るようでした。

・芭蕉の歩いた道、立ち寄ったところ、俳句を詠んだ場所などがよく分かり良かったです。

・桜の木かげが影をつくり、川の水が涼しさをつくり、きれいな町並ですばらしかった。

・芭蕉の体力には感心するばかり。

・芭蕉の人柄も偲ばれる、皆に好かれて歌を残し、句碑として残っている。

・落ち着く場所でした。

松尾芭蕉像

二、大垣城

・石垣の中に古代の化石があり、ガイドさんの説明で初めて分かったのがよかった。

・見学者が少ない時でゆったりしていてよかった。

・大垣の町並みが素敵で、大垣城の優美さがとてもきれい。

・第十一代戸田の殿様の話が面白く、印象に残りました。

・地域のボランティアガイドさんの説明で、大垣市の全体の良さ、災害後の頑張りで、すばらしい復興が窺われます。歴史の智恵を大事にすること、大切さに感心しました。

・四階建てで、見晴らしもよく、四方を見わたせて、気持ちの良い風を感じた。

・町の中にお城があって面白かった。天守に登れて殿様になった気分。

三、大垣市郷土館

・関ケ原の合戦についての説明をガイドさんの流暢な語り口で楽しく聞けました。歴史の断片がひとつひとつ、繋がってきて楽しかった。

・塀の腰板に舟が使われているのは見ごたえがあった。

・ボランティアガイドさんの上手な説明のお蔭で、戦国時代にタイムスリップした気分でした。

・大垣の歴史を学ぶことができました。

・美味しい水がよかった。

四、昼食（四鶏）

・和風懐石料理、量も適当でおいしかった。

・あつあつでおいしかった。

・品数もよく味もよい。

・大垣城の外堀めぐりで、気持ちよく歩き、料理の量も十分、おいしくいただきました。

・色とりどりで、申し分なし。

・ゆったりした広間で料理もおいしかった。グラタン、なくてもよかった。うどんより白い御飯が食べたかった。

・目を楽しませてくれた料理でした。

五、その他

・芭蕉も良かったが、関ヶ原の合戦は歴史を知る上で大変興味深いものであり、むしろこちらの方が大変おもしろかったです。

・水をたくさん汲みました。・・重い・・

・熱中症が心配だったけど風があってよかった。

・トヨタ自動車、製造ラインを見学したい。

・旅をした松尾芭蕉の気持ちにふれ、楽しい思いがしました。

・水の町大垣は、とても暑かったけど、芭蕉の句碑で説明を聞いたり、小学生の俳句を見たり、食事は良かったし、今日は参加して良かった。

・八月の研修は暑いので、七月上旬くらいが望ましいと思います。

・自分では行くことのない所、観ることのない所をみせてもらえます。

・彦根城へ行きたいと思います。

忠順翁の明治十年の東京行き

中澤伸弘

明治十年八月二十一日、東京上野公園で第一回内国勧業博覧会が開催された。この日明治天皇は開会式に行幸され、勅語を賜つた。これは内務卿大久保利通の主唱により、国内の産業奨励を目的として行なはれたものであり、美術、機械、農業、園芸、動物など様々なものを陳列展示したものであり、近代化を勧める我国の明治維新以来十年の産業の発展を示すものとなつた。このあとも明治十四年に第二回、十八年に第三回、またその後もと回を重ねて催されてゐる。

内国勧業博覧会 開会式

第一回の内国勧業博覧会は規模も大きく、わが国初めてのこととあつて、多くの参観者があつたやうだが、忠順もその一人であつた。この年忠順は六十六歳、当時としては高齢なのであらうが、八月二十九日から九月二十二日までの二十日あまりの日程を、深見篤慶らを供に東京へ行つたのであつた。この時の記録に『東遊紀行』があり、また忠順の明治十年の「日次記」にも簡略な記事がある。また『座右記』の最後の方に、この折の巣鴨土井邸訪問の記事があつて、この三つの資料を付け合せてみると、このたびの東京行きの目的の幾つかが伺へるのである。勿論勧業博覧会の参観が大きな目的であるには相違ないが、その他にも幾つかのことがあつたやうである。忠順の東京（江戸）行きは何度かあつたやうで、徳川時代に少なくとも二回以上、維新時に一回、そして今回のやうである。尤もこれ以上の東京（江戸）行きがあつたかもしれないが、それを証するものがない為、その点は不明である。いまここで、明治十年の東京以行きについて、概略を掻い摘んで述べておくことにする。

出発は八月の二十九日、まだ残暑の厳しい時期であつたが、この日忠順は堤の自宅を発ち、新堀の深見篤慶の所へ行つた。翌三十日に深見邸を篤慶らを供として出発し、この日は浜松に投宿した。三十一日は岡部に宿り、翌九月一日は朝方小雨が降つてゐたが、後に回復して富士山を見ることができた。この日は三島武蔵屋に投宿。二日には箱根の山路を越えて大磯の山本屋に泊まる。翌三日は横浜を見て回り東京の小網町四丁目の豊倉房次郎方（『東遊紀行』には鈴木方）に投宿した。東京滞在中の宿はここである。東海道の往復には汽船、人力車、駕籠、そして横浜から汽車のを利用した。横浜へ杖を曳いたのは、開港以来新たな賑はひを見せてゐた横浜を見たいと言ふ希望があつたからであらう。

東京着の翌日は雨、旅の疲れを癒してか外出はなく、五日、六日、また帰国間近の十六日の三度に亘り上野の博覧会を見学してゐる。五日、六日の天気は雨模様であつたやうだ。それでも往来に水天宮に寄つたり浅草や吉原にも足を延ばしてゐる。七日は九段の招魂社、芝の愛宕山に登り、また増上寺などに詣で、九日には人形町で芝居見物に興じてゐる。

先に挙げた忠順の三点の記録から、上京した時に是非会はねばならない人物が二人ゐたことが分かる。一人は土井忠直であり、また橘東世子であつた。「日次記」の十日、十一日の記述はかうある。

十日　晴
神田明神参拝　王子イナリアスカ山
扇ヤ休　スガモ土井君　製綿場縦覧

十一日　曇
朝　本所橘トセ女　□□ヨセ　藤十キ
兵日光発足

十日、忠順は巣鴨の土井邸に行く途中に飛鳥山や王子稲荷神社に参拝し、卵焼きで有名な扇屋に休み、午後に巣鴨の土井邸に参上した。土井家は三河刈谷藩主であり、忠順が最後に仕へた土井利教は明治六年に急逝し、現当主忠直は松平家から入つて後を嗣いだ。廃藩以来既に六年になるし、直接に仕へた関係ではないのだが、忠順はかやうに挨拶に赴い

たのである。旧藩との関係はさう簡単に断ち切れるものでもなかつたやうだ。名和饂飩や有坂紋を献上したところ、忠直から遠祖源頼光の祭典をしたいのだが、東京に頼光を祀る神社があるかどうかの調査を依頼されてゐる。十四日には今度は忠直の遣ひとして家令の別府敦が御礼の品を持参して「従五位君使ニテ来」た。この御礼に十六日にまた巣鴨に参上したが、忠直は学校の試験で不在、奥方にお会ひしたのであつた。頼光の神社については帰国後の二十七日に、「東京中ニハ頼光ノ社无之旨ノ一書ヲ別府氏マデ出ス」とあつて、お尋ねの返事を差し上げたことが書かれてゐる。頼光を祀る神社は東京にはなかつたのである。

一方東世子は橘冬照の妻であり、冬照亡き後養子の道守を育て、守部以来の「椎本舎」を守つてきたのである。忠順は若き日に守部の門人になつて以来、江戸行きには必ず橘家を訪うてきたので、東世子とは深い関係があつた。勿論書状の行き来もあつて、本所松倉町百一番地に転居したことも知つてゐたし、東京行きの折には訪うやうにとの連絡も受けてゐたのである。この日、久しぶりに対面した二人がどのやうな会話をしたかは分からないが、翌十二日に東世子が書いた忠順宛の手紙（投宿中の小網町豊倉方あて）が村上家にあるので、その一端は知られる。

昨日はおもひがけなくめこと給はりてうれしさ□□ニ奉りてなん　松平忠敏ぬし家居しかと知りかね　さまざまかうがへ侍れどせんすべなし　御出かけにしかと名の有書冊ニて御尋あらば第一によろしからん　今名高き人なればたゞちにしれ侍らん　番町とは承れどそことしらぬたづねものはえたえずぞある　さおほしてよ　かしこ　又もとはせ給へ

長月の十二日

今回の橘家訪問は「おもひがけなく」の出来事のやうであつた。忠順は東世子との会話中、松平忠敏の住まひを聞いたやうであるが、これは不明であつた。何かしらの所用があつたのであらうが、これは果たせなかつたやうであり、このあとも忠敏の所を訪うた記事はない。忠敏は三河出身の幕臣で、歌人としても名高く、『三河歌集』や忠順の『詠史河藻歌集』などにも歌がある。このあと明治十五年に六十五歳で逝いてゐるが、このときは牛込北町に住んでゐた。東世子がこの年の八月（巻末の刊記による）に刊行した『明治歌集』の二編に忠敏の歌が載り、その巻末の作者姓名録には「在東京」とのみあつて、その詳細は書かれてゐなかつた。なほ忠順はこの訪問の時に刊行なつたばかりのこの『明治歌集』二編を入手した。ここには忠順の歌が十二首、忠浄六首、その妻の米子二首が採られてゐて、その謝礼も含め書物代として三円を東世子に渡してゐる。米子の歌はあまりお目にかかれないものである。そして、帰宅後の「日次記」によれば『明治歌集』に目を通してゐる。初編は歌の送付が遅れたのか、忠順の歌は巻末の追加の部に二首あるのみである。

さて、忠順一行が箱根を越えた九月二日、十四代将軍家茂へ降家されてゐた和宮親子内親王こと静寛院宮様が、奇しくも同じ箱根の塔ノ沢の療養先にて薨去された。三十二歳であつた。明治天皇の叔母に当られる。十三日にはその葬儀が徳川家所縁の芝の増上寺にて営まれ、偶然の東京滞在中の出来事であつたが、忠順はその御葬式に参じて拝礼してゐる。

十四日は越中島で練兵を見て、その後洲崎明神や深川八幡、深川不動に参拝してゐる。このあとも数日滞在して十八日に東京を発つた。在京の日数は十五泊に亘る。この日は箱根湯元の小川万右エ門へ宿し、翌日は吉原から東へ入つた今井村の「甲州屋キエ門」に投宿、二十日は金谷の山田屋、二十一日は大井川や小夜の中山を越えて新坂の加納屋に泊まり、二十二日に堤の家に帰つてゐる。

帰宅後数日は『江戸名所図会』を眺めてゐるのは、この旅において目にした東京の町と、嘗ての江戸の町との差を懐旧の思ひで再び確認したのではなからうか。忠順の在京中に鹿児島では西南戦役が終盤を迎へてゐたのである。維新後最大の内乱ではあつたが東京の町は博覧会の騒ぎであり、直にはその影響は何もなかつたかのやうであり、忠順はそのことには触れずにゐるが、帰国後の二十四日に城

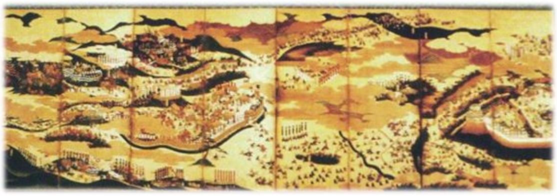
山は陥落し西郷隆盛は自刃して果てたのである。しかしながら忠順の「日次記」にはその記述はない。『東遊紀行』にはこの度の出費が細かに書かれてゐて興味深いものがある。

平成三十年度活動報告

○四月二十二日
定例総会　参加者一〇八名
✶「忠順大賞」表彰式　対象者二十名
✶記念講演　「古書の楽しみ方」
講師　名古屋大学大学院教授
塩村　耕　先生

○八月二十九日
女性部研修会
参加者三十五名
「水の都　大垣の旅」
✶「奥の細道」むすびの地記念館
✶大垣郷土館　見学
✶大垣城見学
✶「四鶏」で昼食
✶トヨタ鞍ヶ池記念館見学

○十月二日
歴史探訪　参加者三十七名
「村上文庫の恩人を訪ねて」
✶刈谷市郷土資料館見学と研修室にて「天誅組」「森銑三・三郎兄弟」「刈谷築城と城下町」のＤＶＤ視聴
✶いずみ庵で昼食後、丈山苑(安城市)にてお茶を戴きながら庭園鑑賞・散策
✶トヨタ会館見学


大垣市郷土館 関ケ原合戦絵図屏風(複製)

○八月三日・九月七日・十月五日・十一月二日
四方樹大学
参加者延べ八十二名
✶講師　名古屋大学大学院教授
塩村　耕先生
✶講義内容　忠順翁の「座右記」

四方樹大学受講風景

○十一月二十三日
村上忠順翁顕彰会役員会
✶忠順翁命日墓参後、役員会。

村上忠順翁顕彰会役員会

第十二回忠順大賞入賞作品

応募総数　一七三八首
選　評　久米翠雲先生

○小学生の部

豊田市長賞　堤小　一年五組　愛知　明陽
かなしいなだいすきだったおばあちゃん　またききたいな百点まん点
※おばあちゃんが亡くなった。何かできると「百点満点」とほめてくれた。まだ聞きたかったよね。

豊田市議会議長賞
堤小　四年一組　佐藤　豪
ぶかぶかだこっそり一人げんかんで　ぼくのブルーのくつはく弟
※こんな大きくカッコいいくつをはきたいな。早く大きくなりたいなと弟さんは思っているよ。

豊田市教育委員会賞
駒場小　二年二組　高桑　侑之
おぶつだんおぼえていないじいちゃんと　話しながらごはんそなえる
※覚えていないおじいちゃん。仏だんにおそなえし、お話もする。すぐそばにいるみたい。すごい！

中日新聞社賞　堤小　三年一組　宇井　沙姫

お母さん毎日仕事がんばってる
花がらスカートだいじにするよ

※食事の支度や外でのお仕事頑張ってるお母さん。花がらのスカート、うれしかったよ・・・。私。

金賞　駒場小　四年二組　石川　結萌

弟がいない間にこっそりと
わたしは母さん一人じめする

※弟はいつも、おかあさんと一緒。今日はお母さんと二人で出かけた。よかった。うれしかったね。

銀賞　駒場小　一年二組　中村　美咲

弟がうまれてみんなうれしいが
わたしは少しやきもちがある

※弟が生まれ、私もうれしいけど、ママやパパが弟ばかりだから、やきもち焼けるよ。分かるね！

銅賞　駒場小　二年一組　手嶌　美緒

雪うさぎとびおき作るうれしいな
妹わたし心もはねる

※朝、とび起きると真っ白な雪。妹とうさぎを作った。二人はうれしくて、飛び跳ねそうだ。

○　中学生・一般の部

豊田市長賞　堤町　石川小智子

お母さんジャニーズコンサート見に行くよ
娘の電話もどる二十(はたち)に

※結婚してる娘からコンサートへの誘い。声のトーンも上がった。二十に戻った感じ。嬉しいですね。

豊田市議会議長賞　前林中　三年三組　川瀬　譲二

久々に会って握った祖母の手を
シワシワな手の小さなぬくもり

※お小遣いをもらって、ありがとうの握手なんだね。すっかりおばあちゃんの手。でも温かい。

豊田市教育委員会賞　前林中　一年一組　菅原　星空

弟と一緒にやった腕ずもう
にぎったあの手が成長してた

※弟と小さい時から、仲良く腕ずもうしてたんだね。久々の腕ずもう、大きくなった腕、びっくり！

中日新聞社賞　駒場町　神谷すえの

せんだんの枝を切るのを待ちてやる
鵯(ひよ)たちが実を食べつくすまで

※せんだんの剪定をしたい。しかし、実がいっぱい。鵯が飛来するまで待とうかなんて。優しいね！。

金賞　前林中　三年四組　中野　颯大

色あせたユニホームみて思い出す
うれし涙と輝くメダル

※九年間の重みのあるユニホーム。チームメイトと歩んだ道。貴重な人生の宝物ですね。

銀賞　駒場町　手嶌　容子

霜柱踏み歩く子と笑いあう
ふるさとの母思い文書く

※子供を呼び起こし、霜柱踏んで遊び楽しんだ。自分の母を思った。ふるさとに文を書いた。懐かしい。

銅賞　駒場町　清水　宣子

紫蘇摘みし汗報われる美しく
赤く染まりて梅仕上がりぬ

※梅とり、紫蘇もみ、漬けるのに塩加減等大変。上々の仕上がり、懐かしい母の味が見えるようだ。

†入賞作品全体は別紙を参照してください。

あとがき

大垣市は小生にとって、未踏の地。縁あって、初めての訪問。郷土館では、ジオラマや合戦の絵図を見ながらガイドから関ヶ原の合戦前夜、東軍・西軍の駆け引きが展開された話は興味津々。いつしか大垣の虜になった自分に気づく。小生には、四人組と称する仲間に大垣出身者もあり、大垣市の観光を提案。全員賛成で、可決されました。

（事務局　寺田）